

高等教育の明日 われら大学人

〈39〉

研究者として、教育者として、そして国土政策の泰斗として大きな足跡を残して学長を退くことになった中村英夫東京都市大学学長の最終講義が八月末、同大横浜キャンパスであった。中村さんは、東京大学工学部を卒業後、東京工業大学、東大工学部で教鞭をとり、東京都市大学の前身の武蔵工業大学教授に、二〇〇四年から同大学長を三期九年務めた。この間、系列の東横学園女子短期大学を統合、大学名を東京都市大学に変えるなど、六学部一六学科を擁する総合大学に発展させた。最終講義のテーマは、「大学生活五〇年を振り返って」。教職員に交じって、東大、東工大の教え子ら約四〇〇人が詰めかけた。最終講義は、自分史にとどまらず、日本の国土開発の歩みとも重なった。最後に、「これからも国土政策において、お役に立つことがあれば関わっていききたい」と述べると、聴衆たちからひととき大きな拍手を浴びた。

学長を退くことになり最終講義を行った東京都市大学学長 中村 英夫さん(七七)

「新島襄の言葉に『良心之全身ニ充満シタル丈前に開通』と丸の内線の夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マサルナリ』というのがあります」

最終講義は、同志社を創った新島襄が最晩年(一八八九年)、療養に励む東京から同志社に学ぶ学生の横田安止に送った手紙の一節から始まった。中村さんは、一九三五年、京都・伏見に生まれ、中学・高校と同志社で学び大きな影響を受けた。一八歳の時、上京して東大教養学部理一類に進む。「当時、湯川秀樹博士のノーベル賞受賞で物理が人気で、はじめは物理をやろうと思っていました。周りに物理をやるに値するのはいっぱいいるし、電気や機械工学科も難しく、結局、土木工学科に入りました」

一九五八年、東大工学部を卒業、帝都高速鉄道(現在の東京地下鉄)に入社。「当時、東

なかむら・ひでお 東京都生まれ、同志社高校卒。一九五八年、東京大学工学部土木工学科卒業。帝都高速鉄道交通営団(現・東京地下鉄)に入社。東京大学生産技術研究所助手、ドイツのシュ

とめ、土地利用の問題に研究の焦点を合わせ、コンピュータを使って土地利用モデルを作り出した。八〇年代には、東南アジア各国などの開発援助のため交通計画の調査を数多く行った。八五年には再び、ドイツに滞在。帰国後は政府の国土審議会、運輸政策審議会、社会資本審議会などの各委員に。道路公団の民営化にも携わった。

一九九五年に阪神淡路大震災が起る。「あれ程まで壊れると思わなかったものが現実には壊れた。調査と復旧に学会のメンバーと共に従事、その成果はその後のインフラの設計にも取り入れられました。それもあって、東日本大震災では高速道路や新幹線に極端な被害は出ませんでした」

一九六六年に東大を退官、運輸政策研究所の所長となり、国内外の若い研究者を育てる。九七年、武

〇九年、武蔵工業大学から東京都市大学への校名変更などを行う。九四年、九五年まで土木学会会長。九八〇一年まで世界交通学会会長。著書に「国土調査」(技報堂出版)など。

「九九年、武蔵工業大学から東京都市大学への校名変更などを行う。九四年、九五年まで土木学会会長。九八〇一年まで世界交通学会会長。著書に「国土調査」(技報堂出版)など。

「九九年、武蔵工業大学から東京都市大学への校名変更などを行う。九四年、九五年まで土木学会会長。九八〇一年まで世界交通学会会長。著書に「国土調査」(技報堂出版)など。

「九九年、武蔵工業大学から東京都市大学への校名変更などを行う。九四年、九五年まで土木学会会長。九八〇一年まで世界交通学会会長。著書に「国土調査」(技報堂出版)など。

研究、教育、国土政策に足跡

400教え子ら 総合大学化に力尽くす 教え子ら 総合大学化に力尽くす



職員顔ぶりと、東京都市大学教員の中村英夫学長

六七年、この研究が評価されドイツのシュトゥットガルト大学に客員講師、客員教授として迎えられる。ドイツで研究や多くの講義に携わった後、帰国、七〇年、東京工科大学社会学部社会学科の助教授に。前年の六九年には東大紛争があった。この分野の学識で経済学や社会学など他の専門分野の研究者と交わる。七七年、母校の東大に

に、東京都市大学講師の角田光男さんがいる。「多くの大学や外国での経験と多様な人々とのつきあいが地域計画、国土計画という広汎なスケールの大きい場での活躍につながったのではないだろうか」

「二〇〇四年、同大学長に就任。学長就任以来、キラリと光る個性ある大学」を打ち出し、学

●この記事・写真等は教育学術新聞の許諾を得て掲載しています。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。